

## 巻頭言

### 特集「リスクとP2M」

国際P2M学会会長 中央大学大学院戦略経営研究科 教授 山本秀男

新型コロナの感染拡大によって、人間の活動そのものに制約が出て、組織を取り巻く環境が激変してきた。一時的な危機管理だけでは対応することができない大きな変化である。本学会の研究テーマもこのような環境変化に整合する、または、先取りする形で変化させていかなければならない。

国際P2M学会の発足当時は、プロジェクトがQCD（品質・コスト・納期）を守れないリスクを解決するために、「不確実性への対応」という概念を導入して、組織の価値創造活動を学際的な視点で分析し、様々な打ち手を研究してきた。

当時の議論では、リスクは、確率的なアプローチによって、制御の対象になり得るものと考え、不確実性は、文字通り先が読めない中で、しかし、それでも何らかの意志決定や行動を起こさなければならぬ状況と考えた。さらに、そのどちらにも当たらない状況を、想定外と分類していたように思う。3者の境界は必ずしも明確ではないが、企業でリスクの管理を成功させるためには、構成メンバーがリスク管理の必要性を認識しなければならない、不確実性への対応には「あるべき姿」から考えるべきである、という議論だった。しかし、東日本大震災とそれにとまなう原発事故の影響や、新型コロナウイルスの感染拡大による世界経済の急速な冷え込みに直面すると、こ

れまで、我々が「想定外」と思っていたことの根拠が、極めて脆弱なものであることをあらためて認識させられる。これからは、リスク、不確実性、想定外を区別して論じることを考え直さなければならないだろう。

現在、本学会の研究発表大会は対面での開催が難しくなり、学校教育も遠隔で行わざるを得ない状況にある。しかし、学会という「場」は、常に学びの「場」として機能し、我々の生活環境の課題を先取りしていかなければならない。自然界や社会で起こっている現象を冷静に分析し、課題に対しては、多様な考え方を受け入れながらも、解決策を論理的に示すことが、学会の使命である。

このたび、P2Mマガジンの特集「リスクとP2M」に対して、多数の執筆者から含蓄の多い論考を寄稿していただいた。これからの社会課題の解決に向けた研究の端緒として活用していきたい。

2020年7月31日 受理